海外就労と自己構築

－デカセギ経験を有する日系ブラジル人若年層の移行過程に注目して－

児島　明

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第８巻 第２号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.8 / No.2

平成23年11月29日発行　　November 29, 2011

海外就労と自己構築

―デカセギ経験を有する日系ブラジル人若年層の移行過程に注目して―

児島　明*

Working Overseas and Self-construction in Extended Adolescence: Focusing on Japanese Brazilian Young People's Migrant Experiences in Japan

KOJIMA Akira*

キーワード：海外就労、自己構築、日系ブラジル人若年層、移行
Key Words: Working Overseas, Self-construction, Brazilian young people, Transition

Ⅰ．課題の設定

1990年の改正入管法の施行からすでに20年が経過した現在、日系ブラジル人のデカセギに関しての調査・研究にはかなりの蓄積がある。比較的新しいところでは、労働市場分析のまとまった成果として大久保（2005）や丹野（2007）があり、地域社会における生活や意識に力点をおいたものとして池上編（2001）や小内・酒井編（2001）などを挙げることができる。両者の論理的な接合を試みているのが梶田・丹野・樋口（2005）であり、ここで提示される「市場と地域社会の相克」という視点は、日系ブラジル人のデカセギをめぐる構造的な矛盾を鋭く突いたものとして重要である。他方、デカセギがしばしば家族を伴う移動であることから、教育分野においても盛んに研究が行なわれてきた。まとまった成果としては、主に日本の学校との関連で教育課題を考察した児島（2006）や森田（2007）、ブラジル人学校に通う子どもたちに注目した拝野（2010）、子どものアイデンティティ形成について論じた関口（2003）などを挙げることができる。また小内編（2009a, 2009b, 2009c）は、「労働と生活」「教育と保育」「ブラジルにおけるデカセギの影響」の３つの観点から日系ブラジル人の移動と定住の諸相を実証的に解明しようとしており、ブラジルでの現地調査もふまえてデカセギが日伯両国の地域社会に及ぼす影響を検討した貴重な成果といえる。

では、このようにさまざまな分野で日系ブラジル人のデカセギをめぐる諸問題について研究が進められるなかで、デカセギを生きる主体はどのようなものとして表象されてきたのだろうか。ここでは、主な表象と考えられるものを３つ挙げておこう。第１は「労働者」という表象である。デカセギ現象を説明する枠組みには、出身地と移住先の経済的格差を背景に個人が行なう合理的選択として移住を描くプッシュープル論や出身地と移住先にまたがる社会的ネットワークに着目する移住システム論など、さまざまなアプローチが存在するが、いずれもデカセギの主体を経済的動機から説明しようとする点では共通している。第２は「住民」という表象である。地域社会における生活や意識に関する関心は、「住民」であることをめぐって生じる摩擦や対立を媒介として立ち上がってきたものといってよい。第３に「親」という表象が考えられる。子どもの教育をめぐる諸課題が検討される際には、この表象が持ちだされることになる。

課題に応じてこれらの表象のいずれかを採用することで、日系ブラジル人のデカセギ現象をさまざまな角度から検討することが可能になってきたわけであるが、その一方で、特定の表象が過度に強調されることによって見過ごされてきた現実があることにも留意が必要であろう。

*鳥取大学地域学部地域教育学科

たとえば樋口（2010）は、外国人に対する自治体の政策やそれを好意的に評価する研究者に共通してみられる特徴として、外国人を「労働者」としてではなく「住民」として表象する傾向の強さを挙げる。そして、この傾向のうちに単なる労働力としてしか外国人を扱わないことへの異議申し立てが含まれていることを認めつつも、「住民」としての側面が過度に強調されることで「労働者」としての側面が逆に覆い隠されてしまうことになり、「労働者」としての地位改善は視野から外れがちになってしまったことを問題点として指摘している（樋口 2010,pp.59-60）。

教育についても同様の問題を指摘できるのではないだろうか。日系ブラジル人の教育に関わる諸課題については、学齢期の子どもへの関心の集中に対応するかたちで、親の教育戦略に着目した研究がなされてきた（志水・清水編 2001, 小野寺 2003, 児島 2006）。子どもの学校適応や進路形成に及ぼす影響の大きさを鑑みれば、親の教育戦略を解明することの重要性は明らかである。ただし、デカセギと教育に関わる課題をめぐって「子どもの教育」について思案する「親」という設定が強調されるあまりに、進路形成の途上にあるデカセギ主体に対してほとんど関心が向けられないできたことは否定しようのない事実であろう。しかし実際には、学費稼ぎその他の理由でデカセギを選択する若年層は一定数存在する。そして、かれらにとっては教育や進路はまさに自らの問題なのである。

今日、グローバリゼーションにともなう社会の構造的変化の影響を受けて青年期から成人期への移行の遅延や不明確化が指摘される一方で（日本教育社会学会編 2005）、境界を越える人の移動を例外とみなし定住こそが常態であるとする国民国家の前提が崩れつつあるともいわれる（伊豫谷 2007）。乾（2010）は、U.ベックの「個人化（individualization）」をめぐる理論を整理しながら、個人化とグローバル化が平行して進行する現代社会を生きる人びとは複数の意味世界のなかで比較、対話、交渉、妥協を繰り返しながら自らの人生経歴を紡いでいくことを余儀なくされると述べているが（乾 2010, pp.64-71）、デカセギという越境行為により不連続な複数の世界を生きる日系ブラジル人青年の移行過程は、こうした状況についての１つの象徴的な事例と位置づけることができるだろう。そこで本稿では、日本へのデカセギを経験した後にブラジルへ帰国した日系ブラジル人青年への聴き取り調査をもとに、デカセギという現象を日系ブラジル人青年の移行過程に位置づけることにより、これまで十分には検討されてこなかったデカセギの生きられ方の諸相について論じたい。

分析に際しては、フィリピン女性の国際労働移動経験について「２つの時間」の交差という観点からの把握を試みる小ヶ谷（2005）の議論が参考になる。小ヶ谷は、家事労働者として海外就労の経験を有するフィリピン人女性（とりわけ開始時に若年シングル）が世帯内での自らの位置づけを変容させていくプロセスに注目し、「海外就労の経験蓄積と、ライフコースの推移という『２つの時間』の交差が、既存のジェンダー規範を再編させていくようなダイナミズムを生んでいる」と論じている（小ヶ谷 2005, p. 106）。小ヶ谷の議論の主眼は、ジェンダー視角から国際労働移動を通した社会移動を検討することにあるため、本稿の目的とは文脈を異にするものではあるが、海外就労の経験蓄積とライフコースの推移という「２つの時間」の交差のありようが、デカセギ経験を有する日系ブラジル人青年の各々に、〈学校から仕事へ〉の直線的・連続的移行に限定されない固有の移行過程（場合によってはその困難）をもたらしている現状を鑑みれば、そのような移行過程の固有性を理解する上で有用な視点といえるだろう。

本稿に即して「２つの時間」に関する説明をさらに加えるならば、第１に、海外就労の経験蓄積に注目することは、日系ブラジル人青年によるデカセギの「時間」的側面に目を向けることである。この側面への関心がこれまで相対的に低かった理由の１つには、主として単純労働者として渡日する日系ブラジル人の日本における職業移動が実質的に不可能に近かったことが挙げられるかもしれない[(1)]。しかしながら、入管法改正にともなう日系人の本格的な流入の開始からすでに20年を経た今日、デカセギ日系ブラジル人

青年の移行過程を検討するうえで、時間的変化は大きな関心の対象となる。第２に、ライフコースそのものの推移についてであるが、デカセギ開始時点でシングルであった日系ブラジル人青年が結婚して親になる、あるいは親との死別により世帯内での地位が変わるといった変化は、移行過程上の大きな転換点となりうる。ライフコースの推移が移行過程におけるデカセギの評価ないし意味づけにどのような影響を及ぼすのかについての検討が求められる。そして、これら「２つの時間」の交差のあり方が、各個人の自己構築の過程や人生経歴の築かれ方にバリエーションを生みだしていくものと思われる。そこで本稿では、「２つの時間」の交差の仕方、及びそれが移行過程に及ぼす影響について事例に基づきながら考察する。

Ⅱ．調査の対象と方法

本稿のもとになっているのは、2009 年 12 月 16 日から 30 日にかけて、滞日経験があり現在はブラジルに在住する 27 名（年齢は 17 歳〜38 歳、男性が 16 名で女性が 11 名）に対して実施したインタビュー調査の結果である。この調査は、ブラジルと日本を行き来するブラジル人青年の進路形成について、渡日や帰国の経緯、家族生活、学校生活、職業生活、余暇の過ごし方、将来展望など、多様な側面から理解することを目的としたもので、インタビューは通訳担当のブラジル人男性（日系３世）の協力のもとで行なわれた（27 名中 10 名については日本語のみでのインタビューが可能であった）。対象の選定については、基本的には通訳担当の男性の出身地域（サンパウロ州トゥッパン）を中心に、知人を紹介してもらいながら機縁法的に増やしていったが、報告者が日本で知り合った人びともいる。

インタビューは、それぞれの地域の日系文化協会や日本語学校で部屋を借りて行なうことが多かったが、対象者の都合に応じて自宅やショッピングモールなどでも行なった。所要時間は１人あたりおよそ１時間半〜２時間であった。インタビューの進め方としては、上記の諸側面に関する基本的な質問項目を準備したうえで、実際のインタビューにおいては質問の順番等にはとくにこだわらず、各項目についてできるだけ自由に語ってもらう半構造化面接の方法をとった。聴き取った内容は了承を得たうえですべて IC レコーダーに録音し、後に文字に起こした。

さて、本稿で考察の対象となりうるのは、自らの意志により日本へのデカセギを選択した経験を有する者であり、27 名のうち 14 名の日系ブラジル人青年（年齢は 19 歳〜36 歳、男性が 9 名で女性が 5 名）がそれに該当した（残りの 13 名中 12 名は親のデカセギに同行して渡日した者である。また、1 名は自らの意志による渡日ではあるが、非日系であることに加えて渡日前から既婚者であったため、他の対象者との条件の違いを考慮して今回の考察からは除外した）。14 名のうち 6 名は日伯間の往復が複数回にわたっており、なかには、最初は親のデカセギに同行するかたちで渡日を経験し、後に自らの意志でデカセギを選択したというケースもある。また、帰国時に中等教育課程修了資格を取得して再渡日といったケースも存在する。したがってデカセギを選択するにいたる経緯はさまざまなのであるが、参考までに 14 名について直近の渡日時点での学歴を確認しておくと、中等教育課程途中 1 名、中等教育課程修了 4 名、大学途中 7 名、大学卒業 2 名となっている。以下では、対象となりうる 14 名のうち、本稿の課題に即して十分な語りを得られた６名に焦点を合わせ、分析・考察を行なっていく（表１参照）。

表１　対象者の概要

事例	年齢	性別	日系	移動歴	教育歴	職歴（転職歴）
ＤＮ	24	男	3世	ヒノポリス→(2000、15歳) 宇都宮→(2003) ヒノポリス→(2006) 豊田→(2008. 11) ヒノポリス	ブラジル学校初等教育課程修了（渡日）→帰国後、ブラジル高校卒業。	宇都宮では自動車エンジンの配線（失敗）。豊田では溶接・スポット。帰国後は、IT関係の研修を受けながら父の農業の手伝い。（父母）ブラジルでは農業。帰国後は再び農業。
ＮＫ	25	女	3世	マリリア→(2000、16歳) 半田→(2003) マリリア→(2006) 半田→(2008) マリリア	ブラジル公立高校（高1までで渡日）→帰国後にブラジル私立高校編入→ブラジル私立大学（法学部、1回生途中で休学して渡日。期限切れのため帰国後、再度受験して合格。現在2回生）	自動車部品。（父母）ブラジルでは時計店。日本では姉と同じ自動車部品（父は9年間、母は7年間）。
ＹＯ	23	男	3世	パストス→(2007、21歳) 豊橋→(2009. 7) パストス	ブラジル公立高校→私立大学（2回生の途中で休学して日本へ。帰国後は2010. 2より3回生から再び始める予定）	兄が登録していた派遣会社を通じて、自動車部品（3ヶ月）、自動車部品（10. 11ヶ月）。（父母）ブラジルでは養蚕、果物畑。
ＦＹ	29	男	3世	トゥッパン→(1997、17歳) 群馬（2日間）→浜松→(2009. 8) トゥッパン	ブラジル高校（高2まで）→帰国後、スプレッーボで中等教育課程修了資格取得。	自動車部品（夜勤、8年間）、タイヤの滑り止めのチェーン、ヤマハの部品。自動車部品（最初と同一）、ホンダ部品、プレス、自動車部品（最初と同一）。帰国後は、自動車とバイクの免許を取り、父の自動車整備の仕事を手伝っている。
ＫＳ	28	男	2世	トゥッパン→(2005、24歳) 武生→(2009. 11前頃) トゥッパン	ブラジル高校卒業→ブラジル私立大学卒業（経営学、21歳）	大学在学中から渡日まで親の会社で働く。武生では村田製作所。（父母）建築材料の会社経営。
ＦＢ	36	男	3世	マリリア→(1991、18歳) 藤沢（6ヶ月）、小金井（6ヶ月）→マリリア（6ヶ月）→新田、大泉（3年半）、富士（2年半）→マリリア（10ヶ月）→小松（6ヶ月）→マリリア→小牧（6ヶ月、クビ）、美濃加茂（残業少）、小松（3年）→マリリア→小松（6年）→(2009. 8) マリリア	ブラジル高校卒業	藤沢では、いすゞ。小金井では東京ガスで穴掘り。大泉では自動車部品。富士では富士フィルムロジスティックスで梱包。ブラジル帰国して香水店を開く（経営難で単身デカセギに）。小松では村田製作所。小牧ではNGK（日本ガイシ）で電子部品。美濃加茂ではソニー。2度目、3度目の小松は再び村田製作所で電子部品。最終帰国後はコネで入った製菓会社の工場で働くが、ブラジルの工場の在り方に耐えられず5日で退社。現在はカラオケバーでウェイターのバイト（金・土・日）。（父）ブラジルで床屋。

Ⅲ.「２つの時間」の交差としての移行過程

１．デカセギ経験により整序づけられる人生経歴

まず、デカセギ経験が自らが進むべき進路を明確化するための重要な契機となった事例を紹介し、海外就労経験がライフコースに及ぼす影響の多様なあり方について考察してみたい。

〈自立した職業人への決意：ＤＮ（24 歳・男性）の場合〉

ＤＮは２度の渡日経験を有している。１度目は 2000 年、家業である農業の不振でデカセギを選んだ父親を「自分も助けたい」と思い、中学校を卒業後、母親と一緒に父親の暮らす栃木県宇都宮市へ向かった。渡日後は、滞日歴の長いおばのつてで自動車エンジンの配線に関する工場に仕事を見つけ、そこで３年間働いた。収入はほとんど父親に渡していたため、自由に使えるお金はさほどなかったが、就労は「大人になったという気分」を味わうのに十分な経験であった。

その後、いったん帰国し、高校に入学した。高校では３歳違いの妹と同じクラスで学ぶことになった。そのこと自体は「やっぱり恥ずかしいは恥ずかしい」経験であったが、それよりも、「この家自体も日本で稼いだお金で買えた家ですし、何せ両親を助けることができたので、後悔はないです」と言い切る通り、家族のために経済的に貢献できたことへの自負が勝る。

高校卒業後は再び「資金を集めるという目的で」日本へ向かった。３年をデカセギの期限と決め、「期限内に稼げるだけ稼いで、すぐ帰国する」という決意をもっての渡日だった。２度目のデカセギ先である豊田市では、工場で溶接の仕事をして働いた。「残業ばっかり。土曜日も一日中仕事をしていて、仕事以外は過ごす時間がなかった」というほど、仕事一辺倒の生活をしていたという。ＤＮにとって日本は、「自分の国ではない」がゆえに、職を失わないためには「従うしかない」場所であった。

３年という期限を終えて帰国した後は、自身もデカセギの経験があり現在はすでに帰国してもともとの家業であった農業に従事している父を手伝いながら、政府が無料で提供しているIT関係の研修コース（1年半）を受講しているところである。これを修了すれば、給料には差があるとしても、採用可能性そのものは大卒者よりもむしろ高いと聞いているので、条件としては決して悪くないと考えている。再渡日は万が一の場合の選択肢としてないわけではないが、「極力それは避けたい」。「自分がちゃんとプロとして仕事を成り立たせていくための準備」に必要な資金はすでに十分蓄えたと思うので、「いま、なんとかそれを成し遂げようと」奮闘している最中である。

世帯への経済的貢献を目的として開始されたデカセギは、家計補助や住居購入といったかたちで達成が具体化されることにより、ＤＮに自立への自信を付与することになった。ここで重要なのは、デカセギの時間が誰とのどのような関係性において生きられたのかが、そこで経験されることの内実を左右するということである。ＤＮの場合、デカセギの選択は、世帯内部での被扶養者としての自らの地位を越えでようとするものであった。したがって、世帯貢献が首尾よく実行されることでＤＹが獲得したのは、稼ぎ手としての自負であったといえる。そして、その自負は自分の人生経歴を自らがコントロールすることへの手応えへと結びつき、デカセギ選択自体をそうしたコントロールの対象と位置づけると同時に、自立した職業人として自らの将来像を描くことを可能にしている。

〈選択すべき進路の明確化：ＮＫ（25歳・女性）の場合〉

父が営む時計店の経営難ゆえに両親に連れられて初めて日本へ渡ったのは、2000年、高校１年生を終えた16歳のときであった。渡日後は自動車部品工場で労働者として働き、収入の半分は家計補助に、残りの半分は自分のための貯金などにまわした。工場労働を中心とした日本での生活は、ブラジルで大学進学することの価値を認識するきっかけとなり、工場労働を３年半続けた後、おばと一緒に帰国した。それは、大学進学を願う「父の意思を尊重して」のものであると同時に、「この生活をずっと続けたいわけじゃないし、ブラジルでいい生活を送るためには教育を受けないといけない」という自らの気づきによる決断でもあった。背景には、「ものすごく仕事をしないと日本では生活がむずかしい」という実感があり、「早くブラジルへ戻って、普通の生活を送りたい」と感じていた。

帰国後は、おばや祖母と同居生活を送る一方で、大学受験準備のため、渡日前に通っていた公立高校ではない私立高校に編入した。日本で働く両親からの送金があってこその私立高校編入であった。高校卒業後は、私立大学法学部に入学するが、父が体をこわして手術が必要かもしれない状況になり、学費捻出がむずかしくなってしまったため、１年生の途中でやむを得ず休学して学費稼ぎのために再び日本へ向かった。そして2年間滞在して2008年に帰国するわけだが、その時点で大学への復学期限を超過してしまっていたため、同一の大学を再度受験して合格し、１年生の初めからやり直しているところである。

帰国後、商品の豊富さや生活の便利さという点で日伯を比較して日本社会の魅力をあらためて認識するということもないではないが、「それがすべてというわけでもない」とも感じている。とりわけ、家族と「ゆったりとした生活リズム」のなかで暮らせることは、彼女にとって何よりも重視されるべきことであり、そのような生活を維持すべく、「すごく安定的な職」とされる公務員になることが現在の目標である。

ＮＫにとって初回の渡日は家族帯同によるもので、必ずしも自らの意志によるものではなかった。しかし、実質的には就労中心の生活を送っている。工場労働の現実は、ＮＫに、日本での生活の非日常性を強く意識させる一方で、ブラジルにおける進学そして就職という「のぞましい」進路形成を明確に浮かび上

がらせることになった。日本での就労は、学ぶことや働くことの意味を自らの問題として受けとめ、深めるための契機となったともいえる。ただし、「のぞましい」進路形成のための帰国の選択は、必ずしも日本での就労を拒否することを意味してはいない。自らが選択すべき進路の明確化は、日本での生活から適度に距離をとりながらデカセギを有効に利用しようとする構えの形成を可能にしている。

〈「ルーツとしての日本」という呪縛からの解放：ＹＯ（23 歳・男性）の場合〉

ＹＯはブラジルの公立高校を卒業後、私立大学に通ったが、「大学に行っていても、あまり大学の意味が見いだせなかった」ため、2007 年、２年生の途中で休学して日本へ向かった。大学の意味への問いは、自らのルーツに関する問いとほとんど重なるものであった。ことあるごとに「日本人の顔をしているのに、なんで日本語をしゃべれないの」と言われることにＹＯは「ものすごくいらだちを感じ」たり、「しんどい」思いをしてきた。「日本人の血が流れているにもかかわらず、読めない書けない」ことへの引け目は、家業である養蚕や果実園の経営で多忙を極める一方で、日本語の継承には熱心ではなく、また日本について語ろうとしない両親（ともに日系２世）への不満に結びつくことにもなった。そのような閉塞状況を打開するため、すなわち「自分自身がどこからきているのかということを理解することによって、いま実際やっていることに対する自覚、自信をもつために」、ＹＯは渡日を決意したのである。

渡日後は、豊橋市ですでに就労生活を送っていた兄のもとに身を寄せ、派遣会社を通じて仕事を探し、自動車部品工場で働きはじめた。「１日中働いて、帰ってからは兄と少し話して、寝る」という生活を通して直面することになったのは、仕事中心で「個人主義的なところがすごく多い」日本社会の現実であり、祖父母から伝え聞いていた家族生活を重視するというイメージからはかけ離れたものであった。日本に実際に身を置いてみても、「全然期待していた答えが返ってこなかった」のである。

この経験を通じてＹＯは、「ブラジル人の間ではまだやっぱり家族としての団結力みたいなものがある」ということ、すなわち確認したかった価値観や生活様式は、他ならぬブラジル社会に内在していたことを再発見することになった。大学に行くことの意味を見出しかねていたＹＯは、帰国した今となっては、「日本という国は日本人のためにあるから、それと同じようにブラジルはブラジル人のためにあるわけだから、ぼくはそのチャンスを無駄にはしたくない」と語り、「大学へ行けばちゃんとした可能性がどんどん広がっていく」と感じながら、復学して「いろんな経験を積んでいきたい」と考えている。

このような足場の再構築の影響は、両親に対するまなざしの変化にも現れている。「いままで両親がぼくの質問に対して答えられなかったのは、答えられなかったという面もあるかもしれないんだけれども、じつは答えたくなかったと言ったほうが正確なのかなと思います」と語る通り、帰国後のＹＯは、自身が日本で経験した現実に重ね合わせながら、「ルーツ」に対する両親の葛藤や複雑な心境を、共感をもって理解しようとするのである。

ＹＯの場合、「ルーツ」の確認という文化的要因がデカセギの主要な動機となっている。ＹＯにとってのデカセギの「現実」は、ブラジル人集住地域に居住し、働くなかで構成されたものといってよい。ブラジル人集住地域は、日本社会への参入を極力限定的なものにとどめ、仕事中心に生活を組織化するためのさまざまな装置が配備された環境といえる。そのような環境の内側で過ごすＹＯに見える「日本（人）」は、仕事一辺倒で家庭生活を顧みない、彼が確認したかった「ルーツ」とはかけ離れた存在であったとしても不思議ではない。その意味で、「ルーツ」への失望は日本社会への参入の結果というよりも、構造的に強いられたものとしての日本社会への非参入の結果と言ったほうがよいのかもしれない。だが重要なのは、このデカセギ経験を経て、ＹＯがブラジル社会に自らを位置づけ直していることである。渡日前、自らの存

在に対する手応えを感じとることのできなかったブラジル社会は、いまや自分固有の人生経歴を築いていくためのかけがえのない場として認識されるようになった。と同時にその経験は、自分に固有の人生経歴を両親に固有の人生経歴と関連づけながら模索していくための契機となっている。

２．ライフステージの変化とデカセギ

次に、子どもの成長を考えて帰国した事例、および父親の病死によって帰国を余儀なくされた事例を紹介し、ライフステージの変化がデカセギの位置づけに及ぼす影響について考察する。

〈子どものための帰国：ＦＹ（29 歳・男性）の場合〉

ブラジルの高校に２年生まで通っていたが、「勉強するのがあまり好きじゃない」ことから、父親の渡日に合わせて高校を中退し、ついていくことにした。1997 年、17 歳のときである。「お金儲けをして、マイホーム、マイカーを買って、生活の質を上げる」という「みんながよくもちがちなイメージ」をもって日本へと向かった。以降、2009 年 8 月に帰国するまでの 12 年間を静岡県浜松市で過ごし、自動車部品工場を中心に同職場への出入りも含め６回の転職を経験している。

長い滞日期間中には多くの同胞と知り合い、友情を深めることにもなった。日本で培った友人関係についてＦＹは、「４ヶ月前（帰国した時期）にぼくが死んでいたとしたら、おそらく日本でぼくを見に来てくれる人たちの数は、ここ（ブラジル）と比べてはるかに多かったんじゃないかと思います」と振り返っている。他方、日本人との交流は工場で知り合った数人との間に限られ、それも「ブラジルでの親しい仲というような感じではなかった」という。

日本に暮らし始めて６年が経過した頃には、同胞女性と結婚し、息子が生まれた。それが転機となり、ＦＹは自らの生活を息子との関係を軸に編成し直していった。「上司の監視がない」ので気に入っていた夜勤も、「息子と会う機会がないということで」昼勤に変えた。仕事のない週末にはショッピング・モールに出向き、子ども用遊具のあるスペースやファストフード店などで家族の時間を過ごすことが習慣となった。

ＦＹは浜松市を「ぼくの最初の家」と呼ぶ。初めて「責任感を持てた」ことや「自分の家族がそこで形成された」ことなどから、「ぼくの人生がそこで始まった」と考えるからである。居住地での生活に対する肯定的な受けとめは、「自分は当然日本人というわけじゃないですけど、居心地がすごくよかったですね」という語りからもうかがわれる。

だが他方、「ブラジルに帰国するという前提があった」ので、息子が「ブラジルのことを知らない」ままに成長することには心配もあった。息子が４歳になった時点でブラジル人学校に通わせることにしたのも、そうした心配からである。「父親」として抱くそのような懸念に、2008 年秋のリーマンショック以降の不況が重なった。結果的にＦＹは、12 年間を過ごした浜松市をあとに、家族そろって帰国することを選んだのである。

帰国後は、「ブラジルに戻った以上、現地での適応はせざるを得ないので」、自動車とオートバイの運転免許を取得する一方で、日本へのデカセギから帰って再び自動車整備の仕事を始めた父を手伝っている。また、「今のブラジルでは学歴がないとむずかしい」との判断から、スプレチーボ試験を受けて中等教育課程修了資格を取得し、同時に、安定した職に就くために警察官採用試験を受けた。第１次試験は合格し、現在、第２次試験の結果を待っているところである。

ＦＹに特徴的なのは 12 年という海外就労期間の長さである。それだけでなく、滞在期間中の帰国は一度もなく、また、転職はあるが居住地も一定のままである。このような条件のもとでＦＹは生活の足場を

構成する諸関係を築いてきた。同胞との間で育んだ豊かな友人関係に支えられながら安心して家族形成に踏みだす経験は、居住地に対する愛着感情の醸成にもつながっていった。「ブラジルに帰国するという前提」を口にしてはいても、17 歳の渡日以降、12 年をかけて培ってきた諸関係を無に帰することになる帰国の選択は容易ではないはずである。ＦＹの場合、息子の誕生による自身のライフステージの変化にともない、海外就労を次世代の成長という観点から見直す機会を得たこと、そこに偶然にも世界的な大不況が重なったことが、帰国を決意させたものと考えられる。ＦＹが帰国後、自分の人生経歴を築いていくためのコントロールを失わずにいられるのは、自らのライフステージの変化を受けとめた結果、選択された帰国であることが大きく影響しているものと思われる。

〈父の死による家業の後継：ＫＳ（28 歳・男性）の場合〉

ブラジルの私立大学を卒業した後、数年間、家業である建材会社を手伝っていたＫＳは、かねてより自力での開業を夢みていた。しかし、そのための資金づくりがブラジルでは思うようにいかないため、「あっちのほうが、お金もっと早う集められるなと思って」日本へのデカセギを決意した。

2005 年に渡日して以降は、事前に派遣先として決まっていた福井県の電子部品製造工場で働いた。渡日後４年半が経過し、ブラジルに暮らす両親や祖父母と会いたいという気持ちも強くなってきたため、あと１年間働いてとりあえず帰国しようと考えていた矢先に飛び込んできたのが、父親が重病との知らせである。荷物をまとめて帰国を急いだのは仕方のないことであった。父親が亡き人となるのは、それから１ヶ月ほど後のことである（それはちょうど、インタビューの２週間前の出来事であった）。

それからは、遺産相続の手続きなどで忙殺される日々を送っており、「考える暇もない」ほどであるが、父親なき後、家業の維持という重責を長男である自分が負わざるを得ないことは十分に承知している。家業の後継者を引き受けることは、ＫＳに大幅な自己認識の変化をせまることになる。

そもそもデカセキは自力での開業を実現するために選択されたものであり、さらにその背後の動機にさかのぼるならば、「きびしい」うえに「すごい頑固だった」父親に、自分の自立した姿を認めてもらいたいがために踏みだした一歩であった。「日本に行って、自分でお金貯めて、自分で店を開いたり、何でもできるようになった」姿を父親に示し、「すごいなぁ」と承認を得ることが、ＫＳの最大の望みであった。

しかし、父の病死によって状況はまったく変わってしまった。かつて、父親が経営する建材会社は、自らが自立するために身を引き離すべき対象としてあった。ところが、父親なきいま、「お父さんのものだったから、今は、やっぱり大きくしてみせたい」と語られるように、家業を受け継ぎ、維持・拡大していくことこそが、父親の承認を受けるための自立した自己の姿として新たに、そして明確にイメージされている。

ＫＳにとってデカセギは、独立開業という自らの夢を実現するための手段として明確に位置づけられていた。言い換えれば、ＫＳが自分の人生経歴を築いていくうえでコントロールできる対象としてデカセギがあったのである。ところが、父親の死という不測の事態が生じたことにより、自らが描いていた人生経歴を修正せざるを得なくなってしまった。「息子」から「家業後継者」へのライフステージの変化は、独立開業による自己の構築の一環として選択されたデカセギの意味を白紙に戻すことになった。しかし、デカセギ経験は、自立した自己の構築に向けて確かに踏みだしたことへの自信ないし手応えとして蓄積され、新たに目指される自己像に接続していくものと思われる。

３．調整困難な「２つの時間」

交差する「２つの時間」の調整が必ずしも首尾よくなされるとは限らない。ここでは、結婚生活の不安定化とデカセギの目的の曖昧化が同時進行するなかで人生経路の構築に混乱をきたしている事例を紹介し、「２つの時間」を調整することのむずかしさについて考察したい。

〈デカセギとライフコースの混乱：ＦＢ（36 歳・男性）の場合〉

高校卒業後に体育教師になりたくて大学進学を目指していたが、給料が安いからというので父親の大反対にあった。ちょうどその頃、先行してデカセギに出ていた仲間の稼ぎ話に魅力を感じており、「いいバイク、いい車に乗ったりとか」の生活にあこがれを抱いていたところでもあったので、渡日を決意した。

1991 年、18 歳のときに初めて日本の地を踏んで以降、2009 年に帰国するまでの 18 年間は移動と転職の連続であった。日伯の往復を５回ほど繰り返し、日本国内で少なくとも７回の転職経験をもつ。居住地も、神奈川、東京、群馬、静岡、愛知、岐阜、石川と、いくつもの土地を転々としており、２度目の渡日時の居住先となる群馬では、親しくしていた同胞女性との間に娘が生まれ、結婚した。

その後、家族で帰国した際には香水を扱う店を開くが、10 ヶ月ほどで経営難に陥ってしまい、店を維持するための資金稼ぎを目的として３度目の渡日を決意する。以降、妻子はブラジル在住のまま単身での往復を繰り返すことになった。残業にも励み、多いときには月に 20 万円以上の仕送りをしていたという。「家族の生活費」と香水店の維持がＦＢにとってのデカセギの目的となった。

しかし、多額の資金を注ぎ込みながらも経営は難航し、最終的には借金まで抱えてしまうことになる。店の経営を全面的に任せていた妻が仕送金の使途を明確にしないことへの不信感も手伝い、夫婦間での喧嘩が絶えず、一度は絶縁しようとしたこともあった。だが思い直し、「また日本へ行って、またお金貯めて、またスタートしましょう。３人で、家を買って」と仕切り直しのための家族揃っての渡日を提案したところ、妻からも 13 歳になる娘からも色よい返事はもらえなかったという。そこで再び単身、日本へ向かう。５度目の渡日先となる石川県でＦＢはある日本人女性と出会い、関係を深めていく。その関係はほどなく妻の知るところとなり、結局夫婦関係は破綻し、2009 年秋（インタビューの３ヶ月ほど前）には公式に離婚が決定した。

最終的にブラジルへ帰国したのは 2009 年 1 月のことである。2008 年のリーマン・ショック以降の不景気によって残業は激減し、平日でも自宅待機の指示が出るようになってきたため帰国を決意したのだった。最初の渡日からすでに 18 年、年齢も 35 歳を超えていた。帰国後は、職を得ようといろいろな会社に履歴書を送ったが、面接に呼ばれることもほとんどないという。「日本でした経験はブラジルでは関係ないって言われたことがある」と述べる通り、滞日期間が長く、ブラジルでの履歴がほぼ空白になってしまうことが、帰国後の就職機会を大きく阻んでいる。

ＦＢにとってデカセギは、高校卒業後の目標喪失を埋め合わせるようなかたちで開始されたものであった。その時点では、デカセギを自分の人生経歴の構築に位置づけていくための明確な視点は持ち合わせていない。デカセギに明確な目的を見出すのは、世帯形成とそれに引き続く家業経営の開始というライフイベントを経ることによってであった。家業経営を軌道に乗せ、世帯を維持するための資金調達の手段としてデカセギは位置づけられ、ＦＢは積極的にそれを担うことになった。世帯維持と家業経営の双方が、デカセギという手段を介しながらトランスナショナルなかたちで達成されることが目指されたのである。しかし、世帯維持も家業経営も破綻が明らかになっていくなかで、デカセギの意味は再び曖昧なものとなっていく。ブラジルに帰国していた期間を差し引いてみても優に 15 年を超すデカセギ経験は、帰国後のキャ

リア形成につながらないどころか、膨大な空白期間としてそれを阻む要因にさえなっている[(2)]。不安定なライフコースがデカセギの目的の曖昧化をもたらし、デカセギに没頭した時間自体が人生経歴を築くにあたって大きな障壁となって立ちはだかっているといってよいだろう。いわゆる「リピーター」層のなかには、このように「２つの時間」の調整がうまくなされないことにより、人生経歴を築いていく上での混乱を生じやすい人びとが少なからず含まれているのではないだろうか。

Ⅳ．デカセギの「時間」とアイデンティティ問題

デカセギ経験を「時間」の観点から理解することの重要性は、当事者のアイデンティティの問題と関わらせて考えるときにより一層明確になる。とりわけ、デカセギの時間的な「長さ」が青年たちのアイデンティティ形成に及ぼす影響は、かれら一人ひとりが自分に固有の人生経歴を築いていく過程を理解するうえでは無視することのできない点である。本節では、前節で紹介した諸事例のうち、滞日期間が長い点では共通しながらも、他のいくつかの点で対照的な２つの事例を取りあげ、デカセギの「時間」とアイデンティティ問題の現出の仕方の関連について検討してみたい。

〈よそよそしい故郷に根を張る：ＦＹの場合〉

ＦＹが 12 年ぶりに帰って来た故郷は、「地元ではあるんですけど、やっぱりみんなもう、ぼくのことを知らないし、出て行っている人も当然多くいると思います」と語られる通り、すでに知り合いもほとんどいない、よそよそしい土地へと変貌していた。妻にとってはなおさらそうした喪失感が強いであろうことも、ＦＹは感じとっている。「自分の仕事があり、お金もあり、自分の家があった」妻の生活は、帰国後、大きく変わったのは確かである。義理の父母と同居生活は妻に「自由がない」と感じさせているであろうこと、また、日本で身に付いた「仕事の生活リズム」を取り戻そうとしても、中等教育課程修了資格のない妻にとって職探しは容易ではないことなど、妻が直面する困難をＦＹも理解しようとしている。

このような状況下にあり、心情的には「日本にいればよかった」と思うことはしばしばである。とりわけ帰国した当初は、「100 円ショップとか交通、マナー」あるいは店のきれいさや品揃えなどをブラジルと比較しては、「日本へ戻りたくてしょうがなかった」という。また、自分たち夫婦が「ある意味方向性を失っているような感じ」になってしまっていることも否めない。「自分の国にいながら外国人の気分」で過ごさざるをえない土地で、夫婦ともに迷いを簡単には拭い去ることはできないでいる。実際、日本での生活とブラジルでの生活を比較しながら、「いろんな意味でどうしても違うので、うまく行かなかったら、もしかしたら日本へ戻ろうかなと考え」がちであるとも語っている。

だがその一方で、息子には「日本とブラジルで気持ちが分かれることにはなってほしくない」と強く願っている。息子の安定した成長のためには、そのように親自身が揺れる姿を決して見せないように心がけ、「ここで根を張っていくことを大前提」に生活を築いていきたいと自分に言い聞かすように語る。

〈「変なブラジル人」：ＦＢの場合〉

ＦＢは滞日期間中さまざまな土地を転々とした。群馬、静岡、愛知など同胞集住地域で暮らすことは「便利」である一方で、「なかなか日本人と接触しない」生活でもあった。対照的だったのが石川での生活である。最初に石川で暮らしたのは３度目の渡日時であった。相対的に同胞が少ない石川では「工場内でも外でも」日本人との接触が生まれ、「はじめて本当に日本人の友達できた」という。日本語を習得して「生活しやすく」なり、「食べ物とか、日本人、夜何しとるとか。スナック行ったり、クラブ行ったり」と、「日本のことどんどん、知って」いくことになった。そして５度目の渡日以降、2009 年に帰国するまでの６年

間を石川で過ごしている。反面、たとえば４度目の渡日時に暮らした小牧市について「俺嫌いよ、ああいうブラジル人いるとこは」と述べるように、同胞が集住していることそのものへの嫌悪感を抱くようになった。

帰国後は新たな働き口を探すのに苦労している。実をいえば、働き口がまったくなかったわけではない。実際ＦＢは帰国後、知人を通じて、親や友人が「マリリアでも一番いいとこだ」と太鼓判を押すほどの大手の製菓会社の工場に職を得ることができた。にもかかわらずＦＢは、５日ほどでそこを退社して周囲を驚かせる。退社の理由は、工場で人びとが働く「姿勢」が「めちゃくちゃ」で、「日本とブラジルでまったく違う」ことに「すごいショック」を受けたことにあった。

この件に関わらず、日常生活のさまざまな場面で再適応の困難を感じさせられる。たとえば、飲みの場で友人たちが楽しむ冗談を自分だけ理解できないことに疎外感を抱かざるをえない。あるいは、週末にアルバイトで働いているカラオケ・バーにおいても、ウェイターとしての対応の仕方がブラジルの基準からすると過剰に丁寧であるとみなされ、からかわれることもある。そのような自己のありようについてＦＢは、「ブラジルに来て、『変なブラジル人』がいる」と自嘲気味に語る。長期にわたる日本滞在で身につけた特定の価値観や所作ふるまいが、ブラジル社会への参入の障壁となっているのである。

しかし他方、日本社会が真に自分を受け入れてくれるか否かについても、ＦＢは懐疑的にならざるをえない。非日系の父親をもち、外見上いわゆる「日本人」とは風貌の異なるＦＢには、どれだけ日本という場にふさわしいやり方を身につけたとしても、最後のところでは十全たる市民として受け入れられないことへの不安を拭い去ることはできない。日本で暮らす限りは「自分がずっと『外人』になる」ことへの不安は、石川で出会った日本人女性との国際結婚を躊躇させる要因ともなっている。

ＦＢは、「俺、人生は半分ブラジル、半分日本」だから「すっごい複雑、頭ん中」と、自らの位置づけをめぐる苦悩について語る。また、それゆえに、「これからどうするかわからない」と将来の方向を見出せないことへの不安を語ってもいる。日本とブラジル、いずれの社会への参入にも困難を感じるなかで人生経歴を展望するのは容易なことではない。

上記２つの事例は、長期間にわたる日本滞在を通じてアイデンティティの揺らぎを経験している点で共通している。しかしながら、アイデンティティの揺らぎ方や揺らぎながらの自己構築の可能性については、それぞれに固有のあり方をみせている。以下では、２つの事例を比較しながら、その違いと違いが生じる背景について検討してみたい。

まず、アイデンティティのどのような側面に揺らぎが生じているのかに関して、２つの事例には違いがみられる。ＦＢの場合、問題となっているのは「ブラジル人であること」と「日本人であること」の間での自らの位置取りのむずかしさである。他方、ＦＹは、確かに帰国後に自らを「よそ者」と感じることがないわけではないが、それは「ブラジル人であること」の揺らぎとして経験されているのではなく、日本で築いた同胞との友人関係の不在による承認の欠如に起因するものと考えられる。すなわち、前者はエスニック・アイデンティティをめぐる揺らぎであるのに対して、後者は自らの支えとしてきた関係性の喪失によって生じる、〈場所〉をめぐるアイデンティティの揺らぎといってよいだろう。

では、このようなアイデンティティの揺らぎ方の違いはなぜ生じるのだろうか。２つの事例を比較してみると、滞日期間中の居住のありようについて対照的な点があることに気づく。ＦＹは一貫して同胞集住地域での生活を続けてきたのに対し、ＦＢは集住地域と非集住地域の両方を経験したうえで、非集住地域での生活を積極的に選択している。このような居住地特性の違いは、日本人との接触可能性を大きく左右する。

集住地域で生活する場合、異文化・異言語環境に参入するストレスが大幅に軽減されるため、効率的に資金を稼ぐことへの集中が可能になる。その一方で、日本社会との接点は消費という窓口にほぼ限定されるため、消費者として経験する便利さや快適さが日本社会の主なイメージとなる。「労働と消費以外、日本人との接触もたいしてもたないまま生活を続け」（山本 2006, p. 187）ることが可能になるのである。ＦＹは長期にわたってまさにそのような生活を続けるなかで、家族を形成したり豊かな友人関係を築いたりしてきた。そのような関係の形成は自らが生活した〈場所〉に対する特別の愛着感情を育むことで自己のアイデンティティの拠り所となってきただけに、帰国後の喪失感も大きなものであったといえる。ただし、その関係形成は同胞に限られたものであるがゆえに、エスニック・アイデンティティをめぐる揺らぎを経験することはなかった。他方、非集住地での生活が長く、日本社会への参入の度合いが高かったＦＢの場合、日本人との深い接触を通してブラジル在住時とは異なる価値観や所作ふるまいを無意識のうちに身につけていくことになった。このようにして身体化された価値観や所作ふるまいがブラジル社会で標準とされるそれらと葛藤を引き起こすことより、エスニック・アイデンティティの揺らぎが生じたものと思われる。

いずれにせよ、２つの事例ともに、帰国した後に何らかのアイデンティティの揺らぎを経験したという事実に違いはない。しかし、その揺らぎの先に自らの人生経歴を展望していけるかどうかは、揺らぎを揺らぎとして受けとめるための〈もうひとつの〉足場をもちうるかどうかによる。ＦＹの場合、〈場所〉をめぐるアイデンティティの揺らぎを、「父親」という〈もうひとつの〉アイデンティティを新たな拠り所とすることによって相対化し、対処可能なものにしていこうと試みている。言い換えれば、自らをライフコース上のある役割に定位することで、デカセギによる時間的変化をコントロールの対象に据え、自分たちの〈場所〉を新たに構築すべく奮闘しているのである。対照的にＦＢは、そのような〈もうひとつの〉足場の獲得には成功していない。そのため、自らが蓄積してきたデカセギの「時間」は、曖昧になったエスニック・アイデンティティ及び不安定なライフコースとともに、落ち着く場所を失って漂い続けている。

Ⅴ．越境生活のなかでの自己構築

１．時間／空間の複数性を前提とした移行過程

デカセギ経験を有する日系ブラジル人青年の移行過程の分析が示唆するのは、グローバル化および個人化によって特徴づけられる現代社会における若者の移行は、もはや直線的に進む時間や単一の空間を前提としてはとらえきれないということである。

久木元（2009）は、従来型の移行モデルのゆらぎに関する国内外の議論を整理し、それを「古典的な移行モデル」から「新しい移行の形」への変化として表現している。「古典的な移行モデル」では、移行とは直線的・一方向的で不可逆的なものであること、さまざまな面での移行が連動して進むこと、誰もが移行を経験し移行を完了することを前提とされてきた。しかし、「青年期と成人期の間に中間的な時期が現れるとともに、一元的だった移行のパターンが複数に分かれ多様化していく」（久木元 2009, p. 211）ことにより、これらの前提は揺らいでいく。そのような事態を受けて、可逆的であること、仕事・パートナーシップ・教育などの諸側面が必ずしも連動せず「断片化」していること、「移行の完了」が自明なものでなくなっていることを前提とする「新しい移行の形」―ヨーロッパの若者研究において「ヨーヨー型の移行（yo-yo transitions）」として概念化されるもの（Walther et al. 2002; Biggart and Walther 2006; Walther 2006）―が提示されることになった。そしていまや、「断片化した複数の移行過程を個々人のレベルでどう調整し調和させていくかが課題となっている」（久木元 2009, p. 213）のである。

こうした観点からすれば、本稿はまさに、「断片化した複数の移行過程」を調整し、調和させていく過程

を、デカセギ経験をもつ日系ブラジル人青年の語りの分析を通じて描き出そうとする試みであったといってよい。取りあげた諸事例を振り返ってみても、就学と就職が順不同で交互に経験されることは決して例外ではなく、パートナーを得て家族を形成しても再びシングルに戻る例もあった。また、就業や結婚と離家のタイミングといった側面についても一元的な移行パターンを見出すことはむずかしい。その意味で、「新しい移行の形」をこれら諸事例のうちに見てとることは、決して不可能なわけではない。

ただし、久木元の議論においては、「断片化した複数の移行過程」はあくまでも個人の人生経歴を強く規定してきた時間軸上の境界線の乱れの帰結として論じられており、デカセギを選択しながら人生経歴を模索する日系ブラジル人青年たちが経験するような、空間的な越境により生じる移行過程の断片化や複数化についての言及はない。すなわち、移行過程が、「断片化した複数の空間」の間の調整や調和が目指されるものとして明確なかたちでは想定されてはいないのである。このことは、それぞれの空間で生きられる時間がどのようなかたちで接合され（あるいは接合困難に陥り）、移行過程に織り込まれていくのかという、時間の「厚み」に対する視点の欠如をもたらしかねない。本稿で具体的な事例を挙げながら検討してきたように、デカセギという海外就労経験は、まさに生きる空間を異にするがゆえに、それまで特に意識することもなく生きてきた時間を相対化することを可能にし、自分の人生経歴を自らがコントロールすべき対象として取り戻すための契機ともなり得た。逆にＦＢのように、「断片化した複数の空間」で生きられたそれぞれの時間を自らに意味のあるものとして調整できないまま、存在論的にもきわめて不安定な状況を生きざるを得ないケースもある。こうした諸事例をも含めて移行過程の現代的課題を追究するためには、時間のみならず空間的次元をも視野に含めたモデルの構築が必要となるだろう。

２．〈場所〉の生成／アイデンティティの生成

ところで、「断片化した複数の空間／時間」を調整し、調和させていくことが、なぜ重要な意味を帯びてくるのであろうか。また、それはどのようにして可能になるのだろうか。

そもそも人生におけるこのような調整が以前にもまして個人に求められるようになったのは、家族、階級、会社、地域社会などの中間集団による規定力が弱体化したことによる。現代社会論では、このようにして個人が集団から解放される一方で、人生に関する選択が専ら個人へと委ねられる状況を「個人化」と呼ぶ（Beck 1986=1998）。さらに、グローバル化が進行する現代は、「だんだん多くの人々が、国民や地域や民族の定位置やアイデンティティから引き剝がされ、はずされてしまったことを特徴とする時代である」（Kaplan 訳書 2003, p. 186）とも認識されている。すなわち、個人化とグローバル化が同時進行する状況のもとでの人生経歴の構築は、アイデンティティをめぐる現代社会に特有の問題と密接に関連しているのである。

では、そこでは何が問われるのであろうか。この点に関わってA.メルッチは、たえまなく変貌する状況や出来事に対応するかたちでなされる自己の「故郷」の再構築こそが、現代社会における主要なアイデンティティ問題であると述べている（Melucci 訳書 1997, p. 132）。これを本稿での議論と関連づけるならば、自己の「故郷」を再構築するための具体的な過程として、「断片化した複数の空間／時間」を調整し、調和させていく営みがあるといえるだろう。本稿においても、「故郷」の再構築を通じたアイデンティティの再編およびそれを通じた人生経歴の再構築は、諸事例に通底する主要なテーマの１つとなっていたといってよい。たとえばＹＯは、自らの「ルーツ」（＝「故郷」）として想像された日本で発見できると期待していた文化的特徴が日本では見つからず、むしろそれがブラジル社会をこそ特徴づける要素であることを再発見することによって、自らが人生経歴を築いていくべき「故郷」の語り直しを行なった。ＦＹの場合は、同胞集住地域で多くの友人に囲まれ、結婚そして子育てといくつかのライフイベントを経験することを通

じて、居住地に対する愛着感情を抱くことになった。居住地に対する「ぼくの最初の家」という名づけは、まさにそこが「故郷」として再構築されたことを示している。都市社会学の知見を借りていうならば、「脱領域化」を経た後に、人びとの日常的な生活圏を中心に「再領域化」が行なわれることにより、〈場所〉の生成が可能になったのだといえよう（町村 1999, p. 171）[3]。

さらにＦＹのケースは、越境移動する人びとの「故郷」の再構築をエスニシティとの関連でのみ理解しようとすることへの注意を促すものでもあった。個人化状況のもとではエスニックな文化的伝統は相対的に弱体化しており、「エスニックな文化は個人に用意された選択肢の一つにすぎない」（樋口 1999, p. 205）ものとなっている。すなわち、現代社会を生きる個人は帰属をめぐって複数の選択肢が存在する状況を生きていることを鑑みれば、特定の帰属の強調はその場を生き抜くための個人戦略としてあり、エスニシティもその際の選択肢の一つとして理解される必要があるということである[4]。これは、裏を返せば、その場を生き抜くための個人戦略としてエスニシティが第一義的なものとして選択されないことも生じうるということである。実際、たとえばＦＹが越境移動にともなう状況の変化に対して「自己の生活史の連続性を確証する」（Melucci 訳書 1997, p. 132）ための拠り所としたのは、エスニシティであるよりも「父親」という社会的アイデンティティであった。

このことは、ニューカマーの教育に関する先行研究において見過ごされていた点に注意を喚起する。端的に言えば、「親の教育戦略」という視点を設定することで見えなくなってきたものがあるのではないかということである。「親の教育戦略」という視点が設定されるとき、「親」であること、そして、「親」として１つのエスニシティに帰属意識をもつことはたいていの場合、自明視されてきたように思われる。しかしながら、上述の議論が示唆するのは、「教育戦略」の考察は、「親」と位置づけられる当事者のアイデンティティ問題を同時に問うことなしには、文化本質主義的な結論に陥ってしまいかねないということである。今後の研究においては、「親」を自明視するのではなく、「親になるという戦略」あるいは「親であるという戦略」のなかでエスニシティや「教育戦略」がどのように選択されていくのか、といった視点も必要になってくるのではないだろうか。

Ⅵ. 結語

本稿では、デカセギ経験を有する日系ブラジル人青年の移行過程は、「２つの時間」（海外就労の経験蓄積とライフコースの推移）の交差の仕方および交差場面における各個人の選択のありようによってさまざまなバリエーションを生みだすことが明らかになった。このことは、現代社会において海外就労経験をともないながら人生経歴を築いていく若者の移行過程を理解するにあたって、少なくとも次の２点を考慮に入れることの必要性を示唆するものである。ひとつは海外就労経験における時間的変化、もうひとつは移行過程における空間的移動である。これらはいずれも移行過程の「断片化」や「複数化」に密接に関連する要因であることからすれば、海外就労経験をともなう若者の移行過程には、グローバル化と個人化を前提とする現代社会における自己構築や人生経歴の模索にとっての課題が、ある意味、凝縮されているとも考えられる。

そこでの主要な課題は、「断片化した複数の時間／空間」をいかに調整していくかということになるだろう。調整は、具体的には帰属をめぐる複数の選択肢からの個人の選択としてなされる。デカセギ労働者として一般には表象され、経済的動機のみによって説明されがちな本稿での若者たちにおいても、帰属をめぐる選択肢は職業に限定されるものではなかったし、また、特定のエスニシティに限定されるわけでもなかった。仮にエスニシティへの帰属が強調される場合でも、それは空間的移動や時間的変化のなかで可変性を有するものであった。本稿では十分に論じることはできなかったが、グローバル化と個人化を特徴と

する社会を生きる若者にとって「『自己』像の構築が現代の消費文化と分かちがたく結びついていること」（南川 2005b,p.126）を鑑みれば、消費文化に関連した選択肢にも今後いっそう目を向ける必要があるだろう。

もっとも、帰属をめぐる複数の選択肢のなかからの選択を通じて自己が構築されることは、経済的な問題からの解放を意味するわけではない。むしろ、労働者以外の社会的カテゴリーを用いての自己定義が盛んになされることによって、デカセギ現象に付随する明らかな階層や格差構造が見えにくくなり、結果として「雇用調整のためのフレキシブルな緩衝要員」（大久保 2005, p. 148）という不安定な立場を追認するという事態も十分に生じうる[(5)]。こうした点を考慮すれば、本稿で論じてきた「２つの時間」の調整に関しても、すべてを個人の選択や責任に帰してしまうのではなく、調整困難に陥る諸要因についての冷静な把握が必要となるだろう。たとえば、海外就労の経験蓄積が、職業移動をともなうキャリア形成につながるものでなかったり、帰国後には一切無効とされてしまうといった事態が、個人の選択肢そのものを狭め、人生経歴を築く際の大きな障壁となっているのだとすれば、そのような不利な状況を少しでも軽減するための措置が必要となるはずである。

以上の点に留意しつつ、今後、日系ブラジル人青年の移行過程に関する研究を進めていくにあたっての課題を２点ほど述べておきたい。第１に、特定の社会的カテゴリーを自明の前提として議論を始めるのではなく、どういった状況においてどの社会的カテゴリーが選択されるのかという過程を考慮すること、第２に、諸個人が自らのアイデンティティ問題に対処しながら人生経歴を築いていくことが既存の階層構造や格差構造の維持とどのように関連しているのかを問うていくことである。

＜注＞

(1) 樋口（2010）は、外国人が日本社会のメンバーたることを強調する「定住化言説」が、実質的には労働の側面を無視し、定住する労働者の不安定な就労状態を放置してきたことを指摘したうえで、「個々の外国人が日本でとりうるキャリア・パス」を視野に入れた配慮の必要性を論じている（樋口 2010,p.60）。すなわち、「必要なのはブラジル人をはじめとする南米人の職業移動を可能にするための政策的措置である」（同上,p.64）。

(2) イシ（2009）は、長期間にわたる日本へのデカセギからブラジルへ帰国した人びとからは、求職にあたって「学歴や職歴の経験不足を懸念する声」や「日本で年を重ねたことに関する悩み」が多く聞かれると述べている（イシ 2009,pp.54-55）。

(3) このことは、アイデンティティの形成・維持における〈場所〉の意義に再考を迫る点で興味深い。乾（2010）は、グローバル化と個人化が進行する現代社会における〈場所〉の意義の喪失を過度に強調するギデンズを批判しつつ、次のように論じている。「伝統的コミュニティが大きく動揺し、断片化されているとはいえ、コミュニティは消滅したわけではなく、多様な形態で存続しあるいは新たに生まれている。その意味では、移行の個人化のもとで、ギデンズの描くようにアイデンティティの形成・維持のほとんどが再帰性にのみ回収されるわけではない。」（乾 2010,pp.112-113）

(4) 仮に特定のエスニシティへの帰属が表明された場合でも、それが他の帰属意識を否定ないし排除することにはならない。南川（2005a）は在米日系人における日系トランスナショナリズムの拡大について次のように論じている。「日系人としてのトランスナショナリズムは、それぞれの国民意識も含めた、他の帰属意識に対して排他的なものではなく、さまざまなレベルで重層する帰属の一つに過ぎない。個人化状況におけるエスニシティとは、一つの帰属意識が他を凌駕したり、強引にまとめあげたりするものにはなりにくい。それは、現代の政治経済構造のなかで構築され、何重にも連なる〈わたし〉を構成する要素の一

つである。」（南川 2005a, p. 141-142）

(5) このような主観と客観の間の乖離をファーロングとカートメルは「認識論的誤謬」と表現している。「階級などの社会構造は、引き続き人生の機会を形づくるが、集団主義的伝統が弱まり、個人主義的価値が浮上するなかで、その社会構造は徐々に見えづらくなりつつある。そして、そうした変化の結果、人々は、社会や世界が予測不可能で危険に満ちたものとなり、それはひとえに個人レベルでしか克服していけないかのようにみなすようになる。」（Furlong and Cartmel 訳書 2009,p.12）

＜引用・参考文献＞

Beck, U. 1986, *Risikogesellschaft Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp,
（＝1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会―新しい近代への道―』法政大学出版局）.

Biggart, A. and Walther, A. 2006, “Coping with Yo-yo Transitions”, Leccardi, C. and Ruspini, E. eds. *A New Youth?*, Aldershot:Ashgate.

Furlong, A. and Cartmel, F. 2007, *Young People and Social Change*, Second Edition, Open University Press, （＝2009, 乾彰夫ほか訳『若者と社会変容―リスク社会を生きる―』大月書店）.

拝野寿美子　2010,『ブラジル人学校の子どもたち―「日本かブラジルか」を超えて―』ナカニシヤ出版.

樋口直人　1999,「個人戦略とエスニシティ」『一橋論叢』第 121 巻, 第 2 号, pp. 338-352.

樋口直人　2010,「経済危機と在日ブラジル人―何が大量失業・帰国をもたらしたのか―」『大原社会問題研究所雑誌』No. 622, pp. 50-66.

池上重弘　2001,『ブラジル人と国際化する地域社会―居住・教育・医療―』明石書店.

乾彰夫　2009,『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち―個人化・アイデンティティ・コミュニティ―』青木書店.

イシ・アンジェロ 2009,「大都市におけるデカセギ帰国者のジレンマ―再出発の戦略と支援活動―」小内透編『講座 トランスナショナルな移動と定住 第 3 巻―定住化する在日ブラジル人と地域社会　ブラジルにおけるデカセギの影響』御茶の水書房, pp. 31-61.

伊豫谷登士翁　2007,「方法としての移民―移動から場所をとらえる―」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う―現代移民研究の課題―』有信堂, pp. 3-23.

梶田孝道・丹野清人・樋口直人　2005,『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク―』名古屋大学出版会.

Kaplan, C. 1996, *Questions of Travel:Postmodern Discourses of Displacement* : Duke University Press,
（＝2003, 村山淳彦訳『移動の時代―旅からディアスポラへ―』未來社）.

児島明　2006,『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー―』勁草書房.

久木元真吾　2009,「若者の大人への移行と『働く』ということ」小杉礼子編『若者の働き方』ミネルヴァ書房, pp. 202-227.

町村敬志　1999,「グローバル化と都市―なぜイラン人は『たまり場』を作ったのか―」奥田道大編『講座社会学 4 都市』東京大学出版会;pp. 159-211.

Melucci, A. 1989, N*omads of the Present:Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Temple University Press, （＝1997, 山之内靖ほか訳『現代に生きる遊牧民―新しい公共空間の創出に向けて―』岩波書店）.

南川文香　2005a,「『在米日系人／在外日本人であること』の現代的意味―エスニシティの現代社会論に向

けて―」『立命館言語文化研究』17 巻, 1 号, pp. 137-143.
南川文香　2005b,「現代社会と見えざる移住者―ロスアンジェルス在住日本人若年層の非合法就労とステイタス―」『神戸外大論叢』56 巻, 2 号, pp. 111-131.
森田京子　2007,『子どもたちのアイデンティティー・ポリティックス―ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー―』新曜社.
日本教育社会学会編　2005,『教育社会学研究』第 76 集（特集 後期 青年期の現在）, 東洋館出版社.
小ヶ谷千穂　2005,「海外就労と女性のライフコース―フィリピン農村部の若年シングル女性と世帯内関係を手がかりに」『ジェンダー研究』第 8 号, pp. 99-111.
大久保武　2005,『日系人の労働市場とエスニシティ―地方工業都市に就労する日系ブラジル人―』御茶の水書房.
小内透編　2009a,『講座 トランスナショナルな移動と定住 第 1 巻―定住化する在日ブラジル人と地域社会　在日ブラジル人の労働と生活』御茶の水書房.
小内透編　2009b,『講座 トランスナショナルな移動と定住 第 2 巻―定住化する在日ブラジル人と地域社会　在日ブラジル人の教育と保育の変容』御茶の水書房.
小内透編　2009c,『講座 トランスナショナルな移動と定住 第 3 巻―定住化する在日ブラジル人と地域社会　ブラジルにおけるデカセギの影響』御茶の水書房.
小内透・酒井恵真編　2001,『日系ブラジル人の定住化と地域社会―群馬県太田・大泉地区を事例として―』御茶の水書房.
関口知子 2003,『在日日系ブラジル人の子どもたち―異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成―』明石書店.
志水宏吉・清水睦美編著　2001,『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって―』明石書店.
丹野清人　2007,『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会.
Walther, A.　2006, “Regimes of Youth Transitions”, *Young*, Vol. 14, No. 2, pp. 119-139.
Walther, A. and Stauber, B. et al. eds.　2002, *Misleading Trajectories*, Opladen: Leske+Budrich.
山本薫子　2006,「国境を越えた『囲い込み』―移民の下層化を促し、正当化するロジックの検討に向けて―」狩谷あゆみ編『不埒な希望―ホームレス・寄せ場をめぐる社会学―』松籟社, pp. 161-197.

付記　本研究は、平成 20・21 年度および平成 23 年度科学研究費助成を受けた研究成果の一部である。

（2011 年 10 月 7 日受付, 2011 年 10 月 17 日受理）